

〔書評〕

早坂七緒著

『Robert Musil und der genius loci』

時田郁子

作家ローベルト・ムージル (1880-1942) は、旧オーストリア・ハンガリー帝国のいくつかの大都市で成長し、ベルリンで文学者としての出発を切り、第一次世界大戦に従軍して各地を転々としながら壮年を迎え、戦後はウィーンに居を定め、晩年を亡命先のスイスで過ごした。早坂七緒氏の著書『ローベルト・ムージルとゲニウス・ロキ』は、著者がムージルに縁のある土地に足を運び、家の内部や周辺の環境を検分した成果をまとめたものである。

ムージルは、代表作『特性のない男』の舞台をウィーンと明記する以外、他の作品ではほとんど具体的な地名を挙げない。早坂氏はムージル文学の世界を構成するモテイーフは彼の各地での体験から生成したと考えて、作品内に匿名で記される土地の情報をムージルの足跡と照合しながら、「創造力としての自然霊」という意味でのゲニウス・ロキ (Genius loci) (12 ページ) の究明を目指す。著者の訪問先は、オーストリアのグラーツ、フィルツモース、シュラートミンク、ウィーン、チェコのフラニツェ (旧メーリツシュ・ヴァイスキルヒェ

ン)、ブルノ (旧ブリュン)、ドイツのベルリン、イタリアのパルー・デル・フェルシーナ、ポルツァーノ (旧ポーツェン)、スロヴェニアのポストイナ、スイスのジュネーブに及ぶ。これらの都市を地図上で確かめると、一世紀前のドイツ語圏の広がりが見えてくる。早坂氏の著書を繙いてムージルの足跡を辿る読者は、当時のドイツ語圏の賑わいを擬似体験することになるだろう。以下では私にとって興味深かった章を紹介したい。

第四章から第六章はブリュンでのムージルの青春を辿る箇所である。私はここを読み、ムージルがチェコ系ドイツ人の出自でありながら、ブリュンのドイツ語系住民になじめなかったと後に「履歴書」(1938年)に記した理由に思いを馳せた。ムージルは親元から大学に通い、短編『トンカ』のモデルとなる女性ヘルマと交際し、文学活動に手を染め、ブリュン日曜新聞に短編小説を載せており、(早坂氏はここに掲載された初期の作品を二編紹介している) 充実した青春を送っていた。それにもかかわらず、彼がなじめないと感じたというのは、身近にいる両親のせいではなからうか。早坂氏が公的資料から立証するところによると、ムージル一家はブリュンで暮らした五軒のうち三軒で父の同僚一家と同じ建物内に住んでいる。大学教授の父アルフレート・ムージルは同僚のエドゥアルト・ドナートと家族ぐるみで親しく付き合ひ、その息子グスタフ・ドナートは『特性のない男』の主人公の友人ヴァルターのモデルになった人物で、ムージルを文学の道に導き入れた友人である。十二歳で寄宿学校に入り、一度親元を離れたローベルトにとって、両親が自分とヘルマの交際を身分違いと言って反対する一方で、別の家族と公私にわたり親しくつきあうことに嫌わしさを感じたのではないだろうか。そしてムー

ジル家とドナート家の親密な関係をブリュンのドイツ語系住民に拡大して「なじめない」と述べたのだろう、こう私は推測した。

第八章で早坂氏はベルリンでのムージルの住まいを検分する。ムージルが大学に通うためにベルリンにやってきてから七年間で下宿した先は八軒に及ぶ。それまでの住まいは両親が定めたのに対し、ベルリンではムージル本人が家を選んだ。彼が探し求めたのは、「僕がこうなりたいたいと思うような人間が先の住人であった部屋」（日記81ページ）であり、彼は部屋を人間の拡大空間と見なし、自らの理想を部屋に投影する。事実、彼は引越しのたびに市内を西へと移りながら「こうなりたいたいと思うような人間」、すなわち、作家になる。早坂氏は住居の変遷に着目することにより、ベルリンでムージルが生涯の伴侶を得て、文学者になる過程を鮮やかに浮かび上がらせたと言える。

第九章から十一章では、ムージルが第一次世界大戦中に赴任した北イタリアとスロヴェニアでの体験が取り上げられる。北イタリアのパライは、イタリアにありながら現在もドイツ語系住民が少数住む土地であり、『グリージャ』の舞台になった。早坂氏は主人公の恋人の本名マリア・レネ・レンツィと同姓同名の人物がグリージャのモデルではないかと推理し、墓参りをしたり、付近の住民に聞き取り調査をするが、最終的に個人のモデルを特定するのではなく、グリージャはこの地域の歴史や自然を体現する人物であると考えるに至る。次いで、早坂氏はポーツェンでのムージルの足跡を追う過程で、十五世紀半ばにこの地にやってきたエレオノーレ・フォン・ポルトガルとその息子マキシミリアン一世のエピソードに行き当たり、またムージルが日記に記した子猫との交流のエピソードを考察し、

これら新旧の出来事が『ポルトガルの女』を彩っていると検証する。早坂氏の案内に導かれ、私はムージルが戦時中にドイツ語圏の中心地から辺境へ、現在から過去へとまなざしを向けるようになり、「特性のない男」で「遠近法的移動」と呼ぶ対象把握の方法を身につけたのではないかと考えた。

さて、ここまでかいつまんで内容を紹介してきたが、簡潔に述べると、早坂氏の著書はフィールドワークに基づく伝記的研究である。早坂氏はムージルの親族から父方の祖母の日記を入手したり、現在はムージルとは縁のない人たちが住む建物の内部を見学し、家の歴史を聞き取っており、関係者の信頼を得て調査を行っている。そこから得た情報をふんだんに盛り込むため、やや冗長な印象を受けるところもあるが、現地に足を運び関係者の協力を得て調査する姿勢は感嘆すべきものであり、この研究の精髓をなしている。さらに欲を言うならば、「ゲニウス・ロキ」とは何なのかを感想を混じえて披露してもらえたらと思つた。

また、早坂氏が著書をドイツで出版したことから、私は日本のドイツ文学研究者が世界に向けて研究成果を発信する意味について考えた。ムージル文学は一九五〇年代からドイツ語圏で再受容され本格的な研究が始まった。日本へはやや遅れて紹介が始まり、これまでに、『特性のない男』（河出書房新社、新潮社、松籟社）や、短篇エッセイ、日記、書簡集が翻訳されている。それに並行してムージル文学の研究も進み、今世紀に入り、大川勇『可能性感覚』（2003）、原研一『物語と不在』（2005）、北島玲子『終わらなき省察の行方』（2010）などの研究書が相次いで出版されている。早坂氏の研究もこうした土壌の上に成立したと言えるだろう。ムージル文学の大き

かりな伝記的研究であるカール・コリーノの『ムージル伝記』（法政大学出版局から刊行中）（2003）と比べ、早坂氏はムージル縁の土地に考察対象を限定することにより、一世紀前のドイツ語圏の様子を中心に周縁の双方向から再現し、読者をムージル文学の世界に案内する。かつてのドイツ語圏の隅々まで観察するまなざしは、ドイツ語圏の外部にいる研究者だからこそ持ち得たものと言え、早坂氏の著書は、ドイツ語圏の内部にいる研究者にも刺激的な研究として、今後のムージル文学およびモデルネ文化研究において必読文献になることだろう。

(Wilhelm Fink, 2011)

オーストリア文学 第二十九号

二〇一三年三月三十一日 (非売品)

編集・発行

日本オーストリア文学会

東京都世田谷区桜上水三二五―四〇

日本大学文理学部独文研究室

気付(電話)〇三―三三三―九一―一五一

製作

研究社印刷株式会社

埼玉県新座市野火止七―一四―八

(電話) 〇四八―四八一―五九〇―一

BEITRÄGE ZUR ÖSTERREICHISCHEN LITERATUR

Jahrgang 29 (2013)

Inhaltsverzeichnis

Beiträge auf Japanisch

Aufsätze

Shinji HAYASHIZAKI: Interkulturalität und Judentum in Kafkas Literatur

— Anhand von *In der Strafkolonie* (1914) und einem Fragment (1914) des

Amerika-Romans *der Verschollene* 1

Yutaka KUNISHIGE: Der Ruf des erzählenden „Ich“ ohne Gewähr

— Ingeborg Bachmann im Vergleich zu Samuel Beckett 10

Chizuko SHIROTA: Über die Novelette *Ich* von Arthur Schnitzler

— Das Thema *«Sprachsepsis»* 20

*

Besprechungen

Mototsugu KATSURA: Yuko Tokita: *Musil und der Baum des Lebens*.

Die Suche nach dem neuen Menschen 31

Ryo YAMAO: Yoshihiko Hirano, *Der Ritualmord in Böhmen. Freud, Kraus, Kafka* 34

Yuko TOKITA: Nanao Hayasaka, *Robert Musil und der genius loci* 37

Hiroaki SEKIGUCHI: Ariko Kato, *Bruno Schulz. Von den Augen zur Hand* 40

* *

Austriaca in japanischer Sprache 2011–2012 42

Mitteilungen der Gesellschaft und des Herausbergremiums 54

Beiträge auf Deutsch

Aufsätze

Motoko YAJIN: Erzähler und verschwiegener Holocaust.

Über den Roman *Suche nach M.* von Doron Rabinovici (1)

*

Deutsche Zusammenfassungen der Aufsätze (11)

Herausgegeben von der Gesellschaft für
österreichische Literatur in Japan

Erzähler und verschwiegener Holocaust¹⁾ Über den Roman *Suche nach M.* von Doron Rabinovici

Motoko YAJIN

1. Einleitung

Die Schwierigkeit bei der Darstellung des Holocaust liegt vor allem darin, dass man dieses unerhörte Ereignis in Wirklichkeit nicht wiedergeben kann. Die Schmerzen der Opfer und die Gräueltaten des Verbrechens sind unvorstellbar. Der dargestellte Holocaust gibt dem Rezipienten keine Möglichkeit des Erlebens als Betroffener, sondern nur als Beobachter. Wie die Kritik am italienischen Film „Capo“ (1960) zeigt, kann man das fiktive Lager und die vorgestellten Leiden der Opfer nur aus der Perspektive des Schaulustigen betrachten. Dabei befindet sich der Zuschauer des Films in persönlicher Sicherheit und nimmt die Schmerzen der Opfer als eine Art Unterhaltung auf, wie bei einem Horrorfilm.

Gleiches gilt für die Aussagen der Überlebenden. In vielen, teilweise berühmt gewordenen Berichten erzählen Überlebende des Holocaust von ihren Erlebnissen (Zeugenliteratur von Autoren wie Elie Wiesel, Viktor Frankl oder Primo Levi). Bei der Lektüre erfährt der Leser von der Unmenschlichkeit des Lagers und ist entsetzt über das Verbrechen, das über sechs Millionen Menschen fast „automatisch“ in den Tod schickte. Dieses Gefühl entsteht jedoch nur bei der Lektüre der erschreckenden Szenen. Wie Ruth Klüger kritisch äußert, können solche Berichte aufgrund der Tatsache, dass die Autoren das Lager überlebt haben, auch als übliche „escape story“ mit Happy-End²⁾ rezipiert werden.

Um dies zu vermeiden, versucht der französische Regisseur Claude Lanzmann in seinem Dokumentarfilm „Shoah“ zweierlei: Erstens blickt er auf den Holocaust vom gegenwärtigen Standpunkt zurück. Er will nämlich das vergangene Ereignis nicht einfach wiedergeben, sondern mit seinem Film festhalten, wie die Leute heute³⁾ von der Vergangenheit erzählen. Man hört die Berichte und sieht zugleich den leidenden Gesichtsausdruck der Menschen, ihr Schweigen, ihre Tränen oder ihr Lächeln. Angesichts der Schmerzen, die die Interviewten nicht verbergen können, denkt der Zuschauer daran, dass der Holocaust bei den betroffenen Menschen nie verlöschende Spuren hinterlassen hat.

Zweitens versucht der französische Regisseur den Holocaust aus verschiedenen

オーストリア文学

29

日本オーストリア文学会

2013

BEITRÄGE ZUR ÖSTERREICHISCHEN LITERATUR Jg.29

2013